〈公募論文〉

ホモセクシュアリティをめぐって

――「社会構築主義・本質主義論争」の一側面――

魚住洋一

一九七〇年代末から九〇年代初頭にかけて、同性愛の「歴史」に関する数々の議論が展開され、それらの議論はしばしば「社会構築主義・本質主義論争」(the social constructionist-essentialist debate)と呼ばれてきた。しかし、歴史学者ジョン・ボズウェルによれば、それは実際には「論争」ではなかった。というのも、それらの議論において、本質主義者を名乗る者は居らず、構築主義者を自称する人々がその論敵と目する人々をそう名づけただけだったからである[Boswell 1990: 133]。ボズウェルは、デイビッド・M・ハルプリンなどによって「本質主義者」と名指された当の本人だが、彼が論争はなかったと述べたのは、構築主義者が槍玉に挙げるような極端な本質主義者などどこにも居ないと語りたかったからではないかと思われる。実際、彼自身、ハルプリンなどの批判に答えており、論争があったことは紛れもない事実である。ただ、この論争を一瞥してみると、ラージャ・ハルワーニが指摘するように、本質主義者が「性的指向」を問題にしたのに対し、構築主義者が問題にしたのは「性的アイデンティティ」であり、両立可能なはずの双方の主張が、そこでは互いに排他的であるかのように論じられたのではないかとの疑念も生じうるのである[Halwani 2006: 209]。――私がここで試みたいのは、ボズウェルとハルプリンというこの二人に考察の対象を絞って、彼らの議論に即しながらこの「論争」の実相を明らかにするとともに、その背後にいかなる問題があったのかを探ってみたいということである。

一

ボズウェルは、「革命、普遍、性的カテゴリー」のなかで、彼のいわゆる「ゲイ・ピープルの歴史」をめぐっての本質主義と社会構築主義の対立を、中世の普遍論争になぞらえて、実在論（リアリズム）と唯名論（ノミナリズム）の対立として語っている。彼の要約によれば、実在論とは、カテゴリーは世界のなかに実在する秩序を認知することによって得られた「普遍（ユニヴァーサルズ）」であり、この秩序は人々が観察できなくても存在し、それは人々が「発見」するものであって「発明」するものではないとの主張である。他方、唯名論とは、カテゴリーは、人々が恣意的に取り決めて作り出したモノの名（nomina）にすぎず、そこに見出される諸事象の区分けは人々による発明にすぎないとの主張である。そう述べたあと彼は、「ゲイ・ピープルの歴史」に関して問題となる普遍とは、「性的選好ないし性的指向」（sexual preference or orientation）というカテゴリーであり、それが社会的所産であるかどうかが論争の的になると語る。彼によれば、異性愛的ないし同性愛的な性的指向というカテゴリーが人間精神の「実在的」な特性を示すものではなく、特定の社会によって発明されたものであるなら、「ゲイの歴史」などありはしないことになるか、あるいは、同性愛はその存在が信じられている社会においてしかその「歴史」をもたないことになってしまうのである［Boswell 1989: 18-20］。

「ソドミーはかつて禁じられた行為の一つであった。それを犯した者はその法的主体にすぎなかった。ところが、一九世紀の同性愛者は一個の登場人物（ペルソナージュ）となった。……同性愛者はその性的欲望と一体化され、それはその人物の性癖上の罪というよりその異形の本性となる。ソドミーを犯す者はかつては性懲りもない異端者であったが、いまや同性愛者は一つの種族（エスペス）となったのである」［Foucault 1976: 59〔五五―五六〕］。――しばしば引用されるミシェル・フーコーのこの言葉は、一見、ボズウェルが危惧したことの表明であるかのように見える。しかし、フーコーがここで問題としているのは「性的指向」ではなく「性的アイデンティティ」であろう。なぜなら、同性愛者が一九世紀にはじめて出現したというこの言葉によって彼が語ろうとしたのは、一九世紀以前にあったのは法を侵犯する肛門性交という「行為」にすぎなかったが、一九世紀においては同性愛者というアイデンティティをもった異形の「種族」が立ち現われたということだからである。(1)

一方ハルプリンは、一九九〇年の『同性愛の百年間』の冒頭で、“homosexuality”という英語が一九世紀末に作り出されたことをもって、「一八九二年以前には同性愛は存在せず性的倒錯しか存在しなかった」と述べているが、それは一つには、同性愛者を生み出すことに大いに関与したのは、同性愛を「性的倒錯」として病理化（セクソロジー）した当時の精神医学であったというフー

コーの言説に修正を加えるためであった。というのも、彼によれば、同性愛は一九世紀には、「男の体に閉じ込められた女の魂」といったジェンダーの逸脱として、さまざまな倒錯と並ぶ倒錯の一つにすぎなかったのであり、同性愛者という「種族」が誕生したのはむしろ、性的な振る舞いが男性的か女性的かという区別などが不問に付され、セックスの対象選択が異性か同性かということのみによって、人々が「異性愛者」と「同性愛者」という二つのカテゴリーに分割されるようになったからなのである［Halperin 1990: 15f.〔二七―三〇〕］。

さて、ハルプリンによれば、オマエは誰なのかというわれわれのアイデンティティは、「人間の行動、態度、趣味、選択、身振り、流儀、仕事、判断、話し方といった広範な領域にわたって微妙かつ巧妙に作用する無言の力」によって作り上げられるものである。彼によれば、一九世紀末に起こったのは、異性愛と同性愛というセクシュアリティが、「人間の体験を解釈し組織化する役割を果たし」、「自己というものを原理的に構成する」、そうした無言の力をもったわれわれの最深部の「秘密」として解釈されるようになったということなのである。つまり、セクシュアリティがアイデンティティの構成原理になるというこの考えが、社会的通念として行き渡ることによってはじめて、人々のアイデンティティは異性愛者／同性愛者という二項対立（ダイコトミー）によって二分され、人々は互いに排除しあうカテゴリーのいずれかに属することになったのである［Halperin 1990: 24f.; 26〔四三、四六〕］[2]。

ところで、ハルプリンによれば、異性愛と同性愛のこの対立は社会によって作り上げられた「文化的虚構」であるが、だからといってそれが虚偽や非実在だというのではなく、それが歴史と文化の外部にあるのではないということであって、「同性愛者と異性愛者は現に存在している」のである。問題は、彼が主張しようとするのが、異性愛者／同性愛者という区分は性的指向の違いによる超歴史的な区分ではなく、むしろ性的指向が、オマエは誰なのかという人々の「真実」を告げ知らせるような、人々のアイデンティティの中核を占めるものとして位置づけられる、そうした特定の社会においてのみ、異性愛者と同性愛者が姿を現わすということである。彼は、「同性愛」という現代の用語を古代人に当て嵌め、その用語をもって分類できるような行動や心理の証拠を発見できるだろうかと問い掛けながら、「これらの用語が〈記述的で超歴史的〉な性格をもつと推定されるならばできるであろうが……」と付け加えている。しかし彼によれば、ここでいう「同性愛」とは、人々のありかたについての純粋に記述的（ディスクリプティヴ）な用語ではなくむしろ規範的（ノーマティヴ）な用語であり、人々のアイデンティティのありかたを規整する働きをなすものであって、それを古代人に当て嵌めることは史実に反することなのである。もっとも彼は、たとえば古代ギリシアに同性愛的な性的指向をもつ人々が居たことを否定するのではない。彼はただ、古代ギリシア人が「同性愛者」というアイデンティ

ティのありかたを認めることができなかったと主張しているだけなのである。彼はこう述べている。「自分と同性の人々との性的接触を求める人々は、（古代ギリシアも含めて）多くの異なった時代や地域に存在していたのだが、そうした人々（あるいは、そうした人々の一部）が同性愛者であるのは、ここ百年ほどのことにすぎない」[Halperin 1990: 28f.〔四八―四九〕]。――ところで、ハルワーニは、同性愛という用語をアイデンティティの構成原理という「規範的」な意味で用いるハルプリンの考えは、本質主義に異を唱えるものではないし、本質主義者にしても彼の考えに反対はしないだろうと語っているが、それは、彼によれば、例外はあるにせよ、少なくともボズウェルなどの本質主義者が、同性愛的な性的指向がアイデンティティの決定因子かどうかという問題にはコミットしないからなのである[Halwani 2006: 216]。ただ、社会構築主義と本質主義の調停が可能だというハルワーニのこの主張に、すぐさまここで同調するのは拙速にすぎよう。私としては、いましばらくハルプリンとボズウェルの議論を辿っていきたい。

二

ハルプリンは、同性愛が資本主義社会の「発明」であることを、古代ギリシアの性愛のありかたと対照させることで際立たせようとする。そのため彼は、プラトンがその対話篇『饗宴』のなかでアリストファネスに語らせた性愛の起源についての神話を手掛かりとして、古代ギリシアの「少年愛」に関する議論を展開している。一方、ボズウェルもまたこの神話に言及しながら、「少年愛」に関してハルプリンが展開したような議論への批判を行なっている。話をより具体的にするため、次に古代ギリシアの「少年愛」に関するこの両者の議論を瞥見することとしたい。

周知のように、『饗宴』で語られたアリストファネスの言葉によれば、太古、人間には球状の体に八本の手足、二つの顔、二つの性器があり、三種類の性――男男、女女、男女――をもちあわせていた。ところが、人間たちは神々を逆鱗させる振る舞いに及んだため、ゼウスによって二つの半身に切り離されてしまった。その後、切り離された半身同士は互いを恋い慕い、性交渉をもつに至ったという。

さて、ボズウェルによれば、この神話による性愛の原因論から読み取られるのは、アリストファネスが、現代のわれわれと同じように、人間は異性愛者と同性愛者という二つのカテゴリーに区分されると見做していたということである。たとえば彼は、こう述べている。「この神話を取り上げた目的は一目瞭然で、アリストファネスも語っているように、人間が主として同性愛的か異性愛的か、いずれかの性的関心をもったグループに区分されるのはなぜなのかを説明することである。こうした性的関心は排他的であるとともに生得のものであり、そのことは、

ある登場人物を〈生まれながらの同性愛者〉として描いた作家、ロンゴス（Longus）によってもあからさまに述べられている」[Boswell 1989: 25]。また、この箇所に続けてボズウェルは、アリストファネスは、排他的な性的選好をもたず、男女いずれにも状況に応じて性的反応を示すような、経験と欲望が未分化な人々など想像もできなかったのだ、とも付け加えている。――このように解釈されるアルストファネスの考えが、きわめて多くのギリシア人たちの共通理解だったとすれば、異性愛者と同性愛者というカテゴリーの区分は「超歴史的」なものである可能性をもつことになろう。

しかし、ハルプリンは、そのことにただちに異議を唱える。彼はまず、アリストファネスの神話は人間を二つではなく三つのカテゴリーに区分しており、互いに異性を求める男女がともに属するカテゴリーに対し、男を求める男と女を求める女を一括りにするようなカテゴリーを想定できるような余地はこの神話にはまったくないと述べる。それに続けてハルプリンは、アリストファネスがこの神話を語ったすぐあと、惹かれ合う男同士について、少年であったときは成人を好み、成人になると少年を愛するようになると述べ、そうした少年と成人の男をそれぞれ“philerast”と“paederast”と呼んでいることに着目する。そして彼は、古代アテネにおいて、成人市民が性的関係をもつことが法的に認められたのは社会的に下位にある非市民だけであり、上位者である成人市民と下位者である女、少年、奴隷、外国人の双方は、その社会的位階に応じてそれぞれ、能動と受動、ファルス挿入と被挿入という、支配と従属の社会的関係をそのまま反映する役割をセックスにおいて演じたことを証拠立てようとする。彼によれば、古代アテネではセックスは、二人がともに行なう相互行為というよりはむしろ社会的上位者がファルス挿入というかたちで一方的に行なう行為であり、したがって、少年愛の関係にある成人と少年を「同性愛者」として同質化することは、強盗を「能動的な犯罪者」とし被害者を「受動的な犯罪者」として双方を犯罪の共犯者とするのと同じく奇怪なことなのである。以上のことを踏まえながら、ハルプリンはこう結論づける。「古代アテネの人々の性的アイデンティティは、彼らの社会的アイデンティティ、公的地位によって決定されたのではないにしても、それらと不可分の関係にあったと思われる。……セックスの相手は二つの大きく異なった種類――男と女ではなく〈能動〉と〈受動〉、支配と従属――に分けられていた。だから、いま流行りの異性愛と同性愛は、古代アテネの人々にとってはまったく意味をなさなかったのである」[Halperin 1990: 30-33〔五一―五六〕]。

ところで、ボズウェルは、ハルプリンへの批判として、アリストファネスの神話で、互いに切り離された太古の人間は一緒に生まれたのだから同年齢であるはずなのに、ハルプリンがそれを無視して、古代ギリシアの同性間の性愛が現代の同性愛とは異なる理由として、とりわけその年齢差を強調しているのは

奇妙ではないか、と述べている［Boswell 1989: 25］。しかし、ボズウェルの主張しようとすることはもっと根本的なところにある。というのも、彼は、古代ギリシアにあったとされる成人市民と少年の間の「少年愛」の存在そのものに疑問を投げ掛けるからである。たとえば彼は、『キリスト教と同性愛』のなかで、例外はあったにせよ「少年愛」が現実に対応していたとは考えにくく、それはむしろ「理想化された文化的慣習」ではなかったかと述べている。彼は、現代、欧米で美しいとされる女性の典型が一〇代の少女であり、美の基準が若さに求められていることに言及しながら、それと同じく古代ギリシア人にとっても、美しい男の理想は「少年」ではなかったかと言うのである。それはあくまでも「理想」であって、"girlfriend"や"boyfriend"という英語の表現が年齢に関わりなく用いられるのと同じく、"paiderastia"（少年愛）という言葉は、実際には欲望の対象の年齢には関係がなかったと彼は述べ、恋愛関係にあった七二歳のエウリピデスと四〇歳のアガトン、六五歳のパルメニデスと四〇歳のゼノンなどの例を挙げている［Boswell 1980: 28-30〔五三―五五、四三四―四三五〕］。ボズウェルは、こうした議論を通じて、古代ギリシアにおいて「少年愛」の名のもとに語られたその背後にあったのは、現代と同じ「同性愛」にほかならないと主張するのである。(3)

三

これまで、古代ギリシアの性愛についてのハルプリンとボズウェルの主張の違いを見てきたが、ここで、今まで触れなかった問題に触れておきたい。それは、ボズウェルが自分は本質主義者だと名乗ってはいないと語った例の一件である。彼は、一九八二年から八三年の論文「革命、普遍、性的カテゴリー」に八九年、新たに書き加えられた「後記」でこう述べている。

「ほとんどの構築主義者の議論は、本質主義の立場には、西洋社会に〈ゲイ・ピープル〉が超歴史的に存在したという仮定以外に、社会が性的（エロティック）感情を作り出すのではなく、それらの感情に影響を及ぼすだけだという仮定が含まれていると決め込んでいる。それは、遺伝子や心理学的要因など、何か他の力が〈セクシュアリティ〉を作り出すのであって、その力は本質的に文化に依存するものではないという仮定である。……しかし、私は人間のセクシュアリティの起源と原因論（etiology）に関して不可知論者であったし、いまもなお不可知論者である」［Boswell 1989: 26］。ここで彼は、セクシュアリティの原因論にはコミットしないと明言しているのだが、ちなみに社会構築主義の大御所と目されるフーコーもまた、同性愛の原因は何かという問いにはどんな立場も採らず、あるインタヴューでその問題を質（ただ）された彼が、「この問題については、いっさい言うこと

はありません。ノー・コメント」と語っていたことはきわめて興味深い［Halperin 1995: 4〔一二〕］。彼は、同性愛などのセクシュアリティが制度的、言説的に形成される条件を歴史的に解明しようとしていただけだというのである。してみると、この二人に限って言えば、本質主義と社会構築主義の「論争」は、「生まれか育ちか（ネイチャー／ナーチャー）」をめぐる論争では必ずしもなかったことになる。

話を進めよう。すでに述べたように、ハルプリンが問題にしたのは、性的指向ではなくあくまでも性的アイデンティティについてであった。では、ボズウェルはどうなのだろうか。厄介なのは、性的指向と性的アイデンティティについての彼の区別がきわめて曖昧なことである。彼は、一九八〇年の『キリスト教と同性愛』のなかで、「ゲイ」を定義して、「同性に対する性的嗜好（インクリネイション）を顕著な特徴として意識している人々」と語っている［Boswell 1980: 44〔六六〕］。この定義で問題なのは、「顕著な特徴として意識している」という一句であろう。この一句だけからすれば、彼は「性的指向」について語っているというよりも、むしろ「性的アイデンティティ」について語っているように思われる。――しかし、『キリスト教と同性愛』の二、三年後に書かれた「革命、普遍、性的カテゴリー」になると、彼の考えはそうした印象とはかなり違ったものだと思わせる箇所が見出されるのである。ここで注目したいのは、ボズウェルが社会構築主義と対比しながら自らの立場を要約している箇所である。そこでの叙述によれば、構築主義とは、「すべての人間は性的に多形的であって」、「社会的圧力や法的禁止、宗教的信念、歴史的ないし個人的状況など外的偶然性によってそれぞれの個人の性的感情の表現が決定される」と考える立場である。それに対して彼の立場は、「すべての人間が分類上それに帰属するような性的な対象選択に基づいた二つないしそれ以上の性的カテゴリーを想定する」立場であるが、ただし「特定の社会の個人は、外的圧力や状況によって、彼らの生まれつきのカテゴリーとは異なるカテゴリーに帰属するように演じたり、あるいは、そう信じたりするように仕向けられることもある」という事情をも考慮する立場である、とそこではそう述べられているのである［Boswell 1989: 23］。問題は、ここで付け加えられた「生まれつきのカテゴリーとは異なるカテゴリーに帰属すると信じるように仕向けられることもある」との但し書きにある。この但し書きによれば、彼の区分は、自らの性的な対象選択を明確に意識する者も居れば、意識しない者も居るような区分である。ところで、この叙述から示唆される彼の考えが決定的なかたちで語られることになるのは、この論文に書き加えられた例の「後記」であろう。というのも、そこではかつての「ゲイ」の定義が修正され、ゲイとは「性的関心が主に同性に向けられている人々であり、彼らがそのことを顕著な特徴として意識しているかどうかには関わらない」と述べられていたからである［Boswell 1989: 35］。彼の「ゲイ」の定義において「顕著

な特徴として意識している」の一句がまったく逆の表現に書き改められたことは、彼が問題としているのが「性的アイデンティティ」ではなく「性的指向」であることを、何にもまして物語っているのではなかろうか。彼は別の箇所で、「〈ゲイ〉という用語が、その性的関心が主に同性へ向けられていること以上の独特の社会的アイデンティティをもつひとを意味するのであれば、その用語を過去にも適用することは困難だろう」と語っているが、この言葉もこのことを傍証するものだと思われる[Boswell 1990: 146]。

四

以上で見てきたように、ハルプリンが問題にしたのは性的アイデンティティであり、古代ギリシア人が同性愛者としてのアイデンティティをもたなかったと主張するとはいえ、彼らが同性への性的指向をもっていたことは是認しており、一方ボズウェルも、多少の曲折はあったにせよ、最終的には性的アイデンティティの問題にはコミットせず性的指向のみを問題にし、同性愛的な対象選択が超歴史的に存在していることだけを主張しているのだとすれば、この二人の主張は、例の「少年愛」についての対立は残るとしても、両立可能だということになる。しかし、事情はそれほど単純なものではない。たとえばボズウェルは、一九八九年のインタヴューで、「構築主義者の多くが強調しようとしているのは……同性への指向や選好に基づいたアイデンティティこそが……現代の西洋に特有の現象だということではないかと思うのですが」との問いに、「この問題の根本的なところは、現代のゲイ・アイデンティティが均一（ユニフォーム）なものだという仮定にあります。しかし、それはまったく誤っているのです」と答えている[Mass 1990: 218]。彼は、別の箇所で、現代において問題なのは単数形の“homosexuality”ではなくむしろ複数形の“homosexualities”ではないかとも語り、「今日、これほど共通点のない複数のパターンのセクシュアリティが単一項目のもとに分類されうるのなら、なぜ通時的（ダイアクロニック）な分類となるとあれほど大騒ぎするのだろうか」と構築主義者に皮肉を浴びせている[Boswell 1989: 21]。彼がこうした皮肉めいた語り口をするのも、ゲイやレズビアンやバイセクシュアル、トランスジェンダーやトランスセクシュアル、ドラッグ・クイーンや異性装（トランスヴェスタイト）者など、さらにはジェンダーやエスニシティや階級の違い、カムアウトしているかクローゼットに留まったままか、多婚的（ポリガマス）かあるいは単婚的（モノガマス）かといった、そのライフ・スタイルも含め、互いに相容れないさまざまな多様性が「ゲイ」として一括される人々に見出されるからであろう。彼はまた、先に引用した「〈ゲイ〉という用語が、その性的関心が主に同性へ向けられていること以上の独特の社会的アイデンティティをもつひとを意味するのであれば、その用語を過去にも適用することは困難だろう」という言葉に続けて、「またそれと同じく、

その用語は、現在においても、一つか二つの狭いサークルの外で生きている人々にも適用できないだろう」とも述べていたのである。

では、このことについて、ハルプリンはどう語るのだろうか。それについて語った箇所を読むと、意外なことに、異性愛者と同性愛者という二つの「種族」が現に存在していると考えていたはずの彼が、ボズウェルの指摘をいわばそのまま受け入れるかのように、ゲイ・アイデンティティが実はきわめて多様であると語り出すのである。一九八七年のインタヴューでの彼の言葉を聞くといい。「ゲイのサブカルチャーを見ると、そこには性のありかたにはきわめて数多くの可能性があることについて、豊富な証拠があります。ですから、ゲイの人々の多くは、セクシュアリティにはただ二つの種類（つまり、〈ヘテロ〉と〈ホモ〉）しかないようなものでないことは分かっているはずです」[Halperin 1990: 44〔七八〕]。――これは彼自身の主張を否定する発言ではなかろうか。というのも、この発言は、「ゲイ」と呼ばれる人々に共通するのは、同性愛的な「性的指向」のみであって、「性的アイデンティティ」ではないと語っているに等しいからである。しかし、その後に書かれた彼のテクストを読むと、この発言が示す方向へ彼の議論は展開されていったように思われる。たとえば一九九五年の『聖フーコー』では、資本主義社会は、それを成立させる構成要件として「異性愛者」を作り上げ、しかもそれを無徴（アンマーク）の項として温存するために、それとは何かが違う人々に誰彼なく「同性愛者」の烙印を押して、彼らを有徴（マーク）の項として棄却（アブジェクト）したのだと述べられている。つまり、そこでの叙述によれば、「同性愛者」とは同性愛嫌悪（ホモフォビック）な言説による作りごとであり、「あらゆる種類の互いに相容れない、論理的に矛盾する概念が投げ捨てられる記号論的ゴミ捨て場」だとされるのである。――「〈同性愛者〉は、〈異性愛者〉ではないすべてというかたちで、否定と対立によって定義づけられる。要するに〈同性愛者〉とは本質をもたないアイデンティティなのだ」。ハルプリンがここでいう「本質なきアイデンティティ」とは一個の矛盾概念であろう。ところが彼は、そのことを逆手にとって、「〈ホモ〉セクシュアル・アイデンティティを、対抗的かつ関係的に、そして……実質（ポジティヴィティ）としてではなく位置（ポジショナリティ）として、実在としてではなく規範に対する抵抗として」定義することができるとし、いわゆる「クイア・ポリティックス」を同性愛者たちの政治的な抵抗戦略と位置づけ、アクト・アップ（AIDS Coalition to Unleash Power）やクイア・ネイションの運動を積極的に評価するのである［Halperin 1995: 44-45; 61; 66〔六七―六九、九一、九八〕］。

さてハルプリンは、「クイア」をその内実によってではなく、対抗性によってのみ定義しようとするのだが、同時にその危うさをも認めている。なぜなら、このクイア・ポリティックスは、「誰でもクイア！」という何でもありのその無内容さによって、ジェンダーやエスニシティなど内部の差異と不平等をウワバミ

のように飲み込んで隠蔽するばかりか、ゲイを脱本質化し非―ゲイ化することで、人々がゲイとして現実に被っている抑圧を曖昧化する危険があるからである。しかし一方それは、その異種混交性ゆえに、さまざまなかたちで異性愛規範に抵抗することにより、既成のアイデンティティのありかたを無秩序にずらしつつ、さまざまな新たなアイデンティティや関係性を創り出す可能性をもつものでもあるとして、彼はあえてそれを擁護するのである［Halperin 1995: 64-67〔九四―九九〕］[4]。

これはハルプリンの「転向」を示しているのだろうか。私はそうは思わない。というのも、彼は一貫して、異性愛者／同性愛者という二項対立（ダイコトミー）のありかたを疑問視し、それをあくまでも資本主義社会によって言説的に作り上げられたものだと考えていたからである。もちろん、「同性愛者と異性愛者は現に存在している」という言葉と「〈同性愛者〉とは本質をもたないアイデンティティなのだ」という言葉の間に大きなブレがあることもまた事実であり、『聖フーコー』のなかで彼は、『同性愛の百年間』の執筆当時は、構築主義を決定論と混同しており、社会的な制約を受けるにすぎないセクシュアリティのありかたが社会的に決定されると信じていた、と告白しているのである［Halperin 1995: 187f.〔一八三〕］。ただ、彼の主張のこうした揺れ動きを考えるうえで忘れてならないのは、エイズ・パニックなどによって同性愛差別が米国で加熱化していた当時の状況であろう。そうした差別とどう闘うかという課題は、アカデミックな体裁を保つ『同性愛の百年間』ではほとんど語られはしなかったが、きわめてポリティカルな内容を含む『聖フーコー』では積極的に語り出されることになる。――おそらく彼の主張のブレの背後にあったのは、「同性愛者」としてのアイデンティティが社会的に作り上げられた言説上の産物であるとしても、それを否定するなら、差別を撤廃すべく立ち上がるべき「主体」そのものが消去されてしまう、しかし逆に、そうしたアイデンティティを肯定するなら、異性愛者／同性愛者という作りごとの二項対立を再び実体化することになりかねない、というディレンマではなかっただろうか。あくまで学究的立場を守ろうとするボズウェルはこのことについて何も語ってはいないが、同性愛の「歴史」をめぐる彼とハルプリンの間のアカデミックな論争の背後にあったのは、本質主義か社会構築主義かという問題を超えて、同性愛者の抵抗運動をどう展開するのかというポリティカルな課題が孕むそうしたディレンマ、フェミニズムもまた抱えているのと同一の、まだ解決を見ることのないディレンマではなかったかと思われる。

注

（1）　たとえば社会構築主義をごく初期に唱えたロバート・バドガッグもこう述べている。「〈同性愛的〉および〈異性愛的〉行動は普遍的であるかもしれない。しかし、同性愛的あるいは異性愛的アイデンティティ、および、その意識はもっぱら

現代的な現実である。こうしたアイデンティティは、個人に生得のものではないのであって、ゲイであるためには、個人的嗜好（インクリネイション）をもつことや同性愛的な行為をすること以上の何かが必要である。つまり、社会が示す態度の総体、特定の文化やサブカルチャーの形成、社会的諸関係などがまずもって必要となる。〈同性愛的〉行為を〈行なう〉ことと〈同性愛者〉であることとは、まったく異なったことなのである」[Padgug 1990: 58f.]。

（2）しかし、セクシュアリティがアイデンティティの決定要因とされるというのは、実に奇妙なことではないか、とハルブリンは問い掛ける。たとえば、性の好みを食の好みと比べてみるがいい。われわれにしても、誰かが鶏の胸肉を好むからといって、そのことからその人物の生まれつきの性格を判断したり、そのことをその人物のアイデンティティを決定するものと考え、彼を「胸肉食者」（pectoriphage）などと呼んで、その原因を精神医学的に探ろうとはしないだろう。――そのように述べながら、彼は、だとすれば性の好みも同じではないか、実際古代ギリシアにおいては、食に関してと同様、性に関してもそんなことは誰もしなかったのだ、と訴えるのである［Halperin 1990: 26f.〔四六―四七〕］。

（3）ボズウェルは、あるインタビューで、現代のポルノ映像のなかで映し出されるいわゆる「顔面噴射」を引き合いに出し、実際にはほとんど誰もそんなことをしないだろう、そんな風に映すのは文化的慣習なのだ、と語り、古代ギリシアの文献に描かれる「少年愛」もそれと同じではないか、と述べている。つまり、それらも彼のいう「文学的投射（エマネイション）」の影響を受けており、額面どおりに受け取るべきものではないのである［Mass 1990: 205f.］。

（4）フーコーは一九八一年に、同性愛という問いを、「私は何者なのか」という私の「真実」を発見しようとする問題に引き戻すのではなく、いかなる関係が同性愛を通じて発明されるのかと問い直しつつ、新たな生の様式を創造することこそが問題なのだと語り、また、それは同性愛者の内在的性質によってではなく、同性愛者たちの社会における「斜めの」位置によってはじめて可能になると述べていたが、ハルブリンのクイア・ポリティックスは、こうしたフーコーの考えから着想を得たものなのである［Foucault 2001: 982-985］。

引用文献

Boswell, John, 1980 *Christianity, Social Tolerance, and Homosexuality*, Chicago, The University of Chicago Press（『キリスト教と同性愛――一～一四世紀西欧のゲイ・ピープル』大越愛子・下田立行訳、国文社、一九九〇年）.

――, 1989 "Revolutions, Universals, and Sexual Categories," in: Martin Duberman et al. (eds.), *Hidden from History*, New York, Meridian. First published in somewhat different form in: *Salmagundi*, No. 58-59, 1982-1983.

――, 1990 "Concepts, Experience, and Sexuality," in: Edward Stein (ed.), *Forms of Desire*, New York & London, Routledge.

Foucault, Michel, 1976 *Histoire de la sexualité, vol. 1, La*

volonté de savoir, Paris, Gallimard (『性の歴史I　知への意志』渡辺守章訳、新潮社、一九八六年).

——, 2001 "De l'amitié comme mode de vie," in: Michel Foucault, *Dits et écrits II. 1976-1988*, Paris, Gallimard.

Halperin, David M., 1990 *One Hundred Years of Homosexuality and Other Essays on Greek Love*, New York & London, Routledge (『同性愛の百年間——ギリシア的愛について』石塚浩司訳、法政大学出版局、一九九五年).

——, 1995 *Saint Foucault: Towards a Gay Hagiography*, New York, Oxford University Press (『聖フーコー——ゲイの聖人伝に向けて』村山敏勝訳、太田出版、一九九七年).

Halwani, Raja, 2006 "Prolegomena to Any Future Metaphysics of Sexual Identity," in: Linda Martín Alcoff et al. (eds.), *Identity Politics Reconsidered*, New York, Palgrave MacMillan.

Mass, Lawrence, 1990 "Sexual Categories, Sexual Universals: A Conversation with John Boswell," in: Lawrence Mass, *Homosexuality as Behavior and Identity*, New York, Haworth Press.

Padgug, Robert, 1990 "Sexual Matters: On Conceptualizing Sexuality in History," in: Edward Stein (ed.), *Forms of Desire*, New York & London, Routledge. First published in: *Radical History Review*, Vol. 20, 1979.

（うおずみ　よういち・京都市立芸術大学）